

序 論

- 今日のメッセージの中心聖句、マタイ6章33節、「だから、神の国とその義とを、まず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」は、聖書の中でも、クリスチャンたちに最も知られている言葉の一つである。
- この聖書の言葉は、一般的に、どちらかと言うと、「義務」的な角度から理解され、受け取られていることが多いように思う。あるいは、何か、神様との取引の条件のように取られている。神様のことを、ある程度自分の生活の優先順位のトップの方に入れておけば、私たちの生活も保障してもらえるとというような。
- それゆえ、この聖書の言葉が引用されるたびに、聞いた人々の中に、どこかプレッシャーをかけられたような、重い、堅い雰囲気が出るような気がする。
- しかし、この聖句は、多くの人々が、よく聞き、知っている割には、それを実践し、その後続く祝福の約束、「そうすれば、それら必要なものはすべて与えられる」という部分を実体験している人は多くない。
- これは、大変残念なことである。神様とその言葉である聖書の言葉が、如何に「現実的な真実さ・真理」であることを知ろうとするなら、この言葉ほどふさわしい聖句はない。
- しかし、私は、今日、このお言葉を、単に、クリスチャンの「義務」として味わうのではなく、むしろ、それを、クリスチャンの「使命」として味わい、神様からのメッセージをお伝えしたい。
- 即ち、「神の国と神の義とを第一に求める」ことは、クリスチャンの「使命」だと言うメッセージである。「神を第一にする」ことは、クリスチャンの「義務」ではなく、「使命」である。
- 即ち、クリスチャンは、「そのために」、即ち「神の国とその義とを求め」ために存在しているのである。

本 論

1. クリスチャンとは、すべて「使命」をもって生きている人である。

A. そのことを私たちに明確に示しているのは、ヨハネ15章16節のイエス様の言葉である。

1. ヨハネ15章16節でイエス様は、このように言われた。「私があなたがたを選び、任命したのです。それは、あなたがたが行って、実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり・・・」。
2. ここで言われていることは、
 - (1) 私たちクリスチャンは、イエス様によって選ばれた存在である。即ち、
 - イエス様の一方的な愛と恵みによって、私たちはイエス様に選ばれ、神の子となったのである。
 - (2) しかし、イエス様が、私たちをクリスチャンとして選んだのには目的があった。だから、私たちに任務を与えて、それぞれの任地に派遣されたのである。
 - イエス様は言われた。「私があなたがたを『選び、任命』し、遣わした」と。
 - それは、私たちが、牧師とか、宣教師とか、伝道師になると言う職業的な聖職者になることを意味していない。すべてのクリスチャンに関する言葉である。
 - その目的・任務・使命は、「行っていつまでも残る実を結ぶ」ことであった。
 - それはいつまでも残る、即ち、永遠に残る実である。言い換えるなら、結局は、無くなる地上的、現世的な祝福ではない。永遠的、霊的な実である。
 - それは、品性の実、御霊の実であり、また、伝道の実である。誰かが私たちの生涯を通して、救いに与ることである。
 - そのための任地とは、家庭であり、職場であり、学校であり、住んでいる地域のコミュニティーである。

B. しかし、残念なことは、これらのことを生涯の「使命」として意識しているクリスチャンが、極めて少ないことである。

1. 多くのクリスチャンたちが、「クリスチャン生涯」について少し誤解しているように思う。多くの人々のクリスチャン生涯の理解は：
 - (1) イエス様の十字架と復活が自分の罪の為であると信じ、罪が赦され、神の子とされる。
 - (2) 生きている間、神様の子として、神様が共にいて、守ってくださり、助けてくださり、必要なものを肉体的、経済的、精神的、信仰的に与えてくださる。とにかく地上的祝福を期待する。
 - (3) そして、死んだら神様の御許である天国に行く。これがクリスチャン生涯だと思っている。
 - (4) このように、多くの人々は、クリスチャン人生の在り方を個人的角度からのみ見ている。

(5)そして、もし、余裕があれば、外に向かって貢献することであろうと言う姿勢である。(どこか、America First に似ている)

2. 確かに、これらは、一見すると、どこも間違っていない。

(1)しかし、これらは、クリスチャン生涯についての半分の Truth である。即ち、これらは、みな、神の子として「選ばれた者」の「特権」に関して述べているだけである。

(2)これらのクリスチャン像では、上述のヨハネ 15 章 16 節でイエス様が言われた、クリスチャンが選ばれた者として与えられた「使命」「任務」については何も意識されていない。

(3)これがクリスチャン・ライフなら、ノン・クリスチャンの生活・人生と余り変わらない。

●もしクリスチャンが、結局のところ、その人生で求めるものが、生活の安全、繁栄、祝福なら(即ち、日本でよく言う「家内安全無病息災」であるなら)、ノン・クリスチャンと同じである。

●即ち、人生で求めているもの、何のために生きているのかという人生の目的が、クリスチャンでも、ノン・クリスチャンでも同じになる。

●では、違いはどこにあるのか? ノン・クリスチャンの場合は、それらの欲しいものを、自分の力と努力で手に入れようとするが、クリスチャンの場合は、神様の助けで手に入れる。

3. 即ち、多くのクリスチャンたちは、「選ばれた者」の「特権」だけに甘んじ、即ち、神の子とされた特権にだけ甘んじ、「使命」「任務」を無視しているか、忘れてしているか、等閑にしている。

4. イエス様は、このように、ヨハネ 15 章 16 節で、「選ばれ、神の子としての特権を得た者」には、果たすべき「使命」「任務」があることを明確に言われた。

5. その同じことを、今日のメイン・テキストであるマタイ 6 章 33 節ではと言う表現をもって言われているのである。

6. 即ち、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」とは、義務であると言うより、私たちがクリスチャンとして果たすべき使命なのである。私たちはこのために生きているのである。

II. それでは、クリスチャンの使命・任務とは何か?

A. イエス様は言われた、「神の国とその義とを、まず第一に求めなさい」と。これがクリスチャン人生の使命である。

1. この言葉は、決して、神様に、私たちの生活に必要な物を満たして頂くためには、私たちの方でも、まず、神様を第一にしておかなければならない、と言うような義務や、取引条件ではない。

2. それは、私たちの使命なのである。ヨハネ 15 章 16 節で学んだように、それこそが、私たちが、クリスチャンになった目的なのである。そのために私たちは生きているのである。

B. それでは、「神の国とその義とを求めなさい」とは、どういうことか?

1. 「神の国」とは、簡単に言うなら、「神の支配するところ」である。

2. 「神の義」とは、神の正義、神の御旨、神の倫理的ルールを意味する。

3. 多くの学者が、この二つは、ほとんど同義語と取るべきだと言う。即ち、神の正義、神のみ旨、神の御心が支配する所、即ち「神の国」の設立を求めることである。(ヘブル語の並行法的表現、類似な表現を繰り返して一つのことを強調する修辞法を考えると頷ける解釈である)

4. 即ち、ここで言われていることは、「神の国」の設立、繁栄、拡大を求めることである。

5. 「神の国とその義とを求めなさい」と言う言葉は、私たちに、「主の祈り」の冒頭の部分を思い出させる。即ち、

(1)「願わくは御名を崇めさせたまえ。御国を来たらせたまえ。御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」である。

(2)正に、それは、神の国とその義の設立への希求以外何ものでもない。

(3)それが、イエス様の願いであり、イエス様の、神の家族として選ばれ、迎えられた私たちクリスチャンたちの使命である。

6. ここで、聖書、特に、新約聖書が「神の国」について言っている箇所を少し引用して、このことに関する理解を深めたい。

(1)「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて、福音を信じなさい」(マルコ 1 章 15 節)。

(2)「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」(ルカ 17 章 20-21 節)

(3)「神の国は、飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです」(ローマ 14 章 17 節)。

- (4)これらを含めて、聖書全体を見る時、「神の国」は、二つの意味で用いられていることが分かる。
- イエス様の最初の降臨と十字架と復活によって、私たち一人一人の心と生涯に個人的・靈的に届けられた神の国
 - もう一つは、その同じイエス様が、もう一度、再臨のイエスさまとして、世界の、永遠の支配者、王の王、主の主として、来られるとき実現する神の国。
 - 聖書は、私たちは、今この二つの「神の国」の実現の間に生きていると言う。そして、そのような者として、前者の「神の国」、即ち個人的、靈的な「神の国」を、世界中の人々の中に、その心と人生に、拡大、拡散するべく「使命」が与えられていると明言する。

(5)即ち、「伝道する」ことである。

4. 「伝道する」とは、どうすることか？

- (1)これについては、テホ兄が先週も少し触れられた。また、今日も、すでに言ったように、私たちがみな伝道者や牧師になることではない。
- (2)あるいは、ある信徒の方々がするように、聖書から説教したり、短いお奨めしたり、バイブル・スタディーを導いたりすることでは必ずしもない。
- (3)勿論、ある人々は、信徒でありながら、フルタイム、パートタイムで神学校や、聖書学校に行つて、そのような訓練を受ける人々もいる。(自分に様々な能力を着けるために、職業を持ちながら、或いは家庭婦人でありながら、夜間の学校で学ぶ人がいることを考えると、こういう人々が、もっと起こっても不思議ではない)
- (4)しかし、大切なことは、私たちが、人々にイエス様のことを伝える、伝道するとは、決して、そのようなことをしなければできないことではないということである。
- 「伝道する」と言うより、むしろ、「証し」することである。即ち、
 - 主がこれまで、私に何をしてくださったか、今何をしてくださっているか、現実の生活、人生で経験していることをそのまま、伝えることである。
 - キリスト教という宗教や、キリスト教の考え方を伝える必要はない。押し売りする必要もない。ただ、自分の身に起こったこと、起こっていることを証しするだけである。
- (5)しかし、そのような言葉による伝達だけではない。ここにパウロの二つの言葉を引用したい。
- ピリピ 1 章 20 節「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。
 - 最初の「今も大胆に語って・・・」の部分は、上記の言葉による伝達に当てはまる場所であるが、後半の「生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって」の部分は、「言葉」による伝達ではなく、Action、「生き様」を通しての証しである。
 - 時には、言葉の証しを超えた、無言ではあっても、その生き様から滲み出る証しが力強い。
- (6)もう一つのパウロの言葉は、I コリント 10 章 31 節である。即ち、「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい」である。
- ここで言われていることは、「飲食」という誰もがする人間としての通常、且つ当然の行為をする時でも、主の栄光のため、神の国の建設、前進、拡大と言う使命感をもってすることの大切さである。
 - 私たちは、なぜ毎日職場で、家庭で働くのか？ お金の為か？ 子育てのためか？ 将来少しでも楽するためか？ 愉しむためか？ クリスチャンも人間としてそのような現実と願望はもっている。悪いとは言えない。
 - しかし、そこにもし何の「使命感」もないなら。それは、ノン・クリスチャンの人生と同じであり、クリスチャンの人生とは言えない。
 - クリスチャンは、パウロが、「飲むにも食べるにも、何事をするにも、神の栄光のため」と言っているように、いわゆる宗教行事をしていないとき、人間として、普通のことをしている時も、それを神の国の建設と拡大と言う使命感をもってするのである。

C. 最後にご一緒に見たいことは、私たちが、そのような使命感をもって生きることを妨げるものは何か？である。

1. イエス様は、マタイ 6 章 19-24 節で、それはまず、「**神様より地上のものを愛する欲望**」である。
 - (1) その代表は、金であり、そのほかにも地位、名誉、金が与えてくれる快樂が挙げられるであろう。
 - (2) 人は言うであろう。金を愛するのは仕方ないと。神様も必要だけど、お金も欲しいと、両方を握ろうとする。しかし、イエス様は言われる。「神と金の両方に仕えることはできない」(24)と。
 - (3) むしろ、地上の銀行に宝を蓄えようとせず、天国銀行に宝を蓄えなさい」(20)と。
2. イエス様は、私たちが使命感をもって生きることを妨げるものについて、もうひとつ、そのすぐ後に語られた。それは、「**神様に対する不信仰**」である。24~30 節
 - (1) 神様への不信仰は、「生きる」ことの重さから来ている。確かに、生きることは重い。馬小屋から始まり、ナザレの貧しい大工のせがれとして育ち、恐らく早くして父を失い、弟妹の面倒を見ながら 30 才まで一家の経済を支えたイエス様は、それを肌で知っておられた。
 - (2) 「まず、神の国と神の義を求めなさい」とは、そのイエス様の言葉であることを忘れないで頂きたい。
 - (3) しかし、私たちの不信仰は、こう言う：「神様、神様」と言っても、神様は、本当に私たちの生活の面倒をみってくれるのか。ましてや、そんな状態で、神の国の建設、繁栄、発展なんて、それどころではない。生きることで精一杯だと。
 - (4) 確かに、「使命に生きる」ことは簡単なことではない。日本語では「命」を「使う」と書くように、命がけであり、ロウソクのように、自分の命を消費して、その任務を果たすものである。
 - (5) 当然、そこには、苦勞があり、苦難があり、不安がある
 - (6) だから、信仰がなければ使命に生きることはできない。悪魔はそこをついて来るのである。私たちが不信仰と思ひ煩いの中にとどめようとする。
 - (7) そんな私たちに、イエス様は、不信仰を捨てて(思い煩うのを止めて、31)、信じて使命に生きるように励まされ、チャレンジされるのである。それは、どんな信仰か？
 - それは、神様を天の父として受け入れ、その愛とケアを信じる信仰である(32)。
 - 救いのときに神様から与えられた「アバ(お父ちゃん)、父よ」と神様を呼ぶ信仰である。ローマ 8 章 15 節。
 - それは、また、空の鳥、野のユリをサンプルにして見ることのできる、神様の自然界、被造物に対する実際のケアの事実から学べる信仰であった。(26-30)

結 論

- 一週間ほど前に、私たちの多くは、日本文化としては、年末恒例の歌の大祭典である「紅白歌合戦」を鑑賞した。
- 日本で歌の世界に生きる人々にとって、この番組の出演者として選ばれることは、一つの大きな夢である。
- しかし、そこに到達するために、ある人々は、10 年も、20 年も、悪戦苦闘し、何遍も挫折し、もう歌の世界で生きることを諦めようとした人たちも沢山いたと聞く。
- しかし、そんな彼らを支えたものは何か？ それは、「使命感」である。
- 歌を歌うことが、私の天職、天から与えられた人生の使命である。この歌を通して、自分を生かし、多くの人々に励まし、慰め、喜びを届けることが、私の使命だと信じたからであった。
- 80 年前に少年少女向けに書かれた「君たちはどう生きるか」と言う本が漫画化され、わずか数か月で 100 万部以上売れたと言う。今人々は、かつてなく、「どう生きるべきか」を問うている。そんな中で、私たちはクリスチャンとしての人生観、使命感をもった生き方を聖書から確立する必要がある。